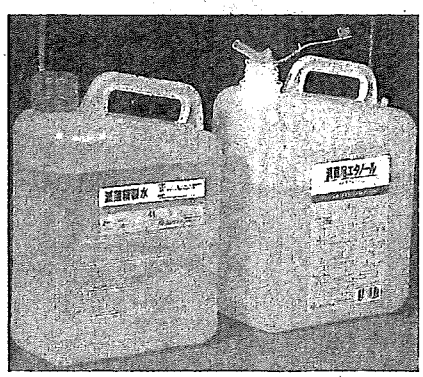
讀賣新聞
THE YOMIURI SHIMBUN
第44505号　(日刊)©読売新聞社2000年
3月8日　水曜日
2000年(平成12年)
発行所
読売新聞社
東京都千代田区大手町1-7-1
郵便番号 100-8055
電話(03)3242-1111

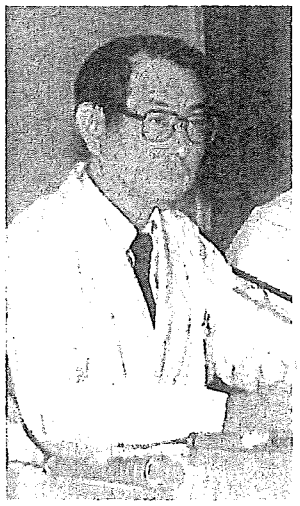
京大、医療ミスで17歳死亡

人工呼吸器に消毒アルコール

看護婦誤注入 2日気づかず

京都市左京区の京都大病院（本田孝行院長）で、難病で入院中の女性患者(17)に装着していた人工呼吸器の加温加湿器に、看護婦が誤って蒸留水（滅菌精製水）ではなく消毒用エタノール（エチルアルコール）を補充し、三日後にこの患者が死亡していたことが、七日わかった。司法解剖の結果、死因は「エタノール中毒」とわかり、京都府警捜査一課と川端署は業務上過失致死容疑事件として特別捜査班を設置、病院関係者から事情聴取を始めた。病院側もミスを認め、遺族に経過を説明、謝罪した。（関連記事3・39面）





患者が死亡した医療ミスで会見する本田院長（７日、京大病院で）

▶看護婦が取り違えたものと同型の蒸留水（左）とエタノールのプラスチックのタンク

蒸留水と取り違える

同署の調べや、この日に記者会見した本田院長らによると、女性患者は呼吸不全などに陥る難病で、十年以上にわたって同病院に入退院を繰り返していた。今回は昨年十月下旬から入院、同病院の一般病棟個室で人工呼吸器管理を受けていた。二月二十四日には、かなり重篤な状態になった。

同月二十八日午後六時ごろ、担当の二十歳代の看護婦が、人工呼吸器の呼気を湿らせる「加温加湿器」の蒸留水が少なくなっていることに気付き、同じフロアの倉庫から、蒸留水入りのプラスチックのタンクを取り出そうとした際、ラベルを確認しないまま、誤ってエタノール入りのタンクを持ち出し、女性患者のベッド下に置いた。

看護婦は八時間交代で女性患者に対応し、約二時間ごとに巡回。タンクから加湿器へは注射器で五十㍉・㍑ずつ補充することになっており、倉庫から持ち出した本人と別の看護婦も知らずに補充していた。今月一日午後十一時に他の看護婦が気付くまで十回以上も補充され、計六百一七百㍉・㍑を吸入したため、血中のアルコール濃度が高まって容体が悪くなったが、看護婦の報告までミスに気付かなかった主治医らは、感染症が悪化したと判断。アルコールを注入したという。

タンクは、エタノール用が五㍑入りで縦約四十㌢、横約三十㌢、奥行き約十五㌢、蒸留水用は四㍑入りでひと回り小さいが、ほぼ同じ形。液はいずれも無色透明で、ベッドの下に置いたため、タンクのラベルが見えにくく、間違ったらしい。

女性患者はエタノールを吸入したため、血中のアルコール中毒への対応はなされなかったといい、女性患者は二日午後七時五十四分に死亡した。同病院は看護婦らに事情を聞いた後、三日午後三時ごろ、川端署に死亡の経過の概要を届け出た。同署は関係者から事情聴取をするとともに、四日、京都府立医大で女性患者を解剖。六日、死因を特定した。

人工呼吸器は、異状を知らせるアラームが装着されていたが、加温加湿器に蒸留水以外のものが入れられるケースは想定外のため無反応だった。

京都大病院は一八九九年の開設。一九九〇年以来、五百例を超える生体肝移植と脳死肝移植の実績を持つ国内最高のレベル。外来患者は年間延べ約四十六万人、入院患者は年間延べ約三十五万人。

本田・京都大病院長の話「このような事故を起こして、誠に申し訳なく思う。患者のご遺族に深くおわび申し上げます」

エタノール

アルコールには、主に工業用に使われるメチルアルコール（メタノール）と、飲料のほか消毒など医療用、化学製品の原料となる工業用のエチルアルコール（エタノール）などがある。エタノールは無色透明、特有の香りがあり、体内に吸収されると中枢神経を抑制する麻酔作用を持つが、血中濃度が0・6%以上になると死亡する。飲酒で0・2%の濃度になると泥酔状態となる。今回のエタノールは医療現場でよく用いられる純度70%の消毒用だった。

京大病院人工呼吸器エタノール事件
府警捜査／病院会見
2000年3月8日　讀賣新聞